

1年経ちました

塾頭通信も回を重ねて、今回で250号となりました。また、塾頭通信を書き始めて、丁度1年目となります。

「継続は力なり」といいますが、それは力があるから継続できたというより、書き続けることによって継続への力を与えられてきたといった方が良いでしょう。

また、私の駄文にお付き合いいただき、目を通してくださる読者の存在が、継続へのエネルギーとなっています。読者の皆さんには、感謝を申し上げたいと思います。

歴史社会学者の小熊英二氏は、かつて先輩から「自分が面白いと思ってもそれが相手に伝わるのは10分の1である。だから、それだけのエネルギーを発しないと他人は動かせない。」と聞かされた話を紹介しています（平成23年8月5日付日経新聞）。彼が論文のテーマにしているのは、自分が面白いと思うことと社会的に意味のある問題だそうですが、私も塾頭通信を書くに当たっては、社会的に意味があるかどうかはともかく、少なくとも自分が興味を感じたものを自分流に咀嚼して表現するように努めています。とはいえ、これまで250号に及ぶ塾頭通信を書き続けてきて、果たしてどれだけ自分の思いを伝えることができたのか自問自答する日々でもあります。

竹内一郎氏は、その著書「人は見た目が9割」の中でアメリカの心理学者アルバート・マレービアン博士の研究の成果を紹介しています。それによりますと、「人が他人から受け取る情報（感情や態度など）の割合は、

顔の表情	55%
声の質や大きさテンポ	38%
話す言葉の内容	7%

だそうです。

この結果は、人とのコミュニケーションはフェイス・ツー・フェイスが一番だということと、言葉だけで自分の思いを伝えることの難しさを示しています。

また、竹内氏はマレービアン博士の研究結果を踏まえつつ、「学校教育では

言葉だけが伝達的手段として考えられる。だから7%を全体と勘違いしている人が生まれる」と指摘しています。これは重要な指摘だと思います。教師の皆さんが、言葉を大切にし、自分の言葉に力を付けていくことは大事なことです。言葉の力だけでは不十分で、顔の表情や態度など、まさに教師の内発する力、いい換えれば「人間力」こそが問われているのだと認識すべきです。

そういいながら、私はといえば、身の程も知らぬと分かっているながら、言葉を活字に置き換えて自分の思いを伝えようという、ゴールのない路に踏み込んでしまいました。

分け入っても分け入っても青い山（山頭火）、これは今の私の心境に外なりませんが、これからも日々変化する世の中にしっかり向き合い、自分の言葉で、自分の思いを発信し続けたいと思っています。（塾頭 吉田 洋一）